
俺が世界の主人公

柊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺が世界の主人公

【Nコード】

N8802Y

【作者名】

柊

【あらすじ】

自分こそがこの世界の主人公と疑わない主人公が、異世界に飛ばされ頑張る話。

俺が世界の主人公

あ、どうも世界の主人公こと佐藤祐樹さとうゆうきです。

別に頭がおかしいわけじゃなくってね、（名前が普通だからって馬鹿にすんなよ）俺のプロフィールを見てもらえば納得だと思うんだよ。

成績優秀（学年一位）

眉目秀麗（もてまくってしょうがないね！）

武道の才能（武道系の部活のやつに勝てる）

人徳にも秀でる（普通こんな人間嫌われる）

気もきくし、苦手なものが存在しないどころか、他の人間より劣っているところが存在しない。

まさに万能の才人と呼ぶべき完璧人間。

別にこうなるために何か努力をしているわけでもないのに。

そんな俺の悩みは毎日に刺激がないこと。

それを解消するための唯一といってもいい趣味がゲームである。（

この話題があるおかげで男子に嫌われない）

ファンタジー系のRPGをやってはこんなモンスターと戦ったりする刺激のある毎日過ごしたいなーと思いつつも。

「またひとつ世界を救ってしまった」

つまりはゲームをクリアしたのである。

さて新しいゲームでもやるかーと思い、積みゲーの山に手を伸ばす。

「つい冗談で一年なのに生徒会長に立候補したらなれちゃったんだよなー」

そんで忙しかったからゲーム積んじやつたんだ。

「マジで刺激がほしいなあ」

異世界で旅とかしたいなあ（できれば勇者希望）

『汝異世界へ渡ることを望むか』

なんだこの頭の中に直接響くような声は。
ま、まさか！

これは夢にまで見た異世界への召喚か！

きつとこれで望むとか言えば勇者への出世コースまっしぐら！

「望む！」

『よかるう』

瞬間、俺は闇に飲み込まれた。

ん？闇？

闇の中で囁かれた。

『我の名は“…の神”』

それを聞いて俺の意識はなくなった。

目が覚め起き上がる。

下を見ると何やら幾何学的な模様の召喚陣っぽいものが。

はっ、やっぱり俺は異世界へ召喚されたんだ！

となると光の女神さまからのお告げなものがあるはず！

と思ったが何やら周りを見ると騒がしい。

「おお、ついに召喚なされました」

ん？俺のこと？

「あなたこそ……」

ふっ、テンプレどおりだな。

どうせそのあと、あなたこそ伝説の勇者様みたいなことをいうんだろっ？

「
“ 闇の神 ” に寵愛されし異世界からきた大魔道士となる方ですか

?

$$\wedge ?$$

「ええええええ！？」

俺が世界の主人公（後書き）

新シリーズもがんばります！

俺こそ主人公のはずなのに…

なんという事実を発表してくれたんだ司祭の方よ。

まあ考えてみればその予兆のようなものはあったが、納得もできない。

予兆というのは最初っからして光の女神様のなものが来るようすではなかったし。（いきなり闇に覆われた）

納得できないのはなぜそんな大魔道士などというちよつと脇なポジションなんだ、普通のRPGとかだったらストーリーに多大な異変はもたらずがすでに過去の偉人となっていたり、秘密を話してすぐ殺されたりなどなど。

たしかにおいしいポジションではあるが、前の世界では俺こそが世界の主人公という感じだったのになぜここでそのポジション？

「ま、いつか」

俺はただ刺激がほしかったただけだしな。

「で、この世界での俺の役目は？」

「おお、飲み込みが早いようで助かりますな」

まあ心の準備はあったしな。

「勇者を隠れ蓑にし、最終的には魔王を倒してほしいのです」

「勇者を隠れ蓑に？」

ちよつと引つかかるな。

「ここは“闇の神殿”です、おそらくここから離れた所にある“光の神殿”でも勇者が召喚されていることでしょう」

「ならその勇者に任せればいいじゃん」

「実は神殿の奥に“闇の泉”と呼ばれる場所があり、そこにつかるとあなたの力が覚醒します」

急に何を？

「それと同じように、“光の神殿”の奥にも“光の泉”があり、そ

ここにつかると勇者の力は覚醒するでしょう」

話をし始めた理由がわからない。

「ですが、勇者が泉につかったとしてもほとんどまともな力は得られないことでしょう」

「どういうことだ？」

「おそらくは勇者が得られるのは他人を引き付けることができる圧倒的なカリスマと小型の魔物などを追いつ追はつ程度の聖なる光でしょう」

「なるほど、実際に頑張るのが俺というわけだな」

「はい、なので街中でいきなり魔王を神とする邪教の信者などにメインに襲われるのは勇者です」

「ふむふむ」

歴史の表舞台に立つのが勇者なのはちょっと残念だが、俺の求めるスリリングな生活はできそうだ。

「じゃあ俺は今どうすればいい？」

「この奥の“闇の泉”に入ってください、闇の力の覚醒と“黒の魔導書”が授けられます」

「“黒の魔導書”？」

「それは後で説明するのでとりあえずもらってきてください」
「お、おう」

さすがにこんなことが人生で起こるとは高校生にもなって（本気で）考えていなかったのでドキドキする。

「よっしゃ！」

頬をたたき、気合を入れ先へ進む。

「んーなかなか長いなあ」

いきなり先が見えないほどの長さの通路だった。

……十分後……

「おお、扉だ！」

通路は長く、もう何時の間にか辺りは黒一色の暗い空間になってい

たところに扉があつた。

「よし開けるか」

扉はなかなか重く、ギギギギと音を立て開いた。

「おおー」

辺りの暗さになれ、周りが見えるようになり、見渡した扉の先はまさに感嘆の声を洩らすのも無理はない光景だった。

それは辺り一面の黒だった。

実は今までは黒という色に嫌悪感があつた。

だがこの黒は不安を煽るようなものではなく、まさに透き通るとでも言えはいいのか、それほどに透明感があつた。

とにかく辺りには、泉というよりも湖とでも言つたほうがいいのでは？と思うような透き通る黒があつた。

「おっとこれに浸かるんだっけ」

さすがに不安になるので水を少し手ですくつてみた。

「な！？」

なんだこれは！この手ですくつたものは今まで触ってきた水とは違つた。

手を傾けると何かが流れ落ちていく。

確かになにかを触っていた。

冷たくなかつたがぬるくもなかつた。

つまり温度は感じなかつた。

今この手を流れ落ちていくのは水ではなく“何か不思議な力”のようを感じた。

「よし」

だがなぜか安全を感じ、覚悟を決めた。

間違いなくただの人間ではなくなるという確証を持つて。

足を踏み入れていく。

普通だつたらどんどん不安になるところだがなぜか心が澄んでいく。

『汝力を求めるか』

あの時の声だ。

「ああ、もちろんだ」

『まず闇を操る力を与えよう』

泉に満ちる力が流れ込んでくる！

理解した、きつとこの泉に満ちる闇を自分は操ることができるだろう。

『その闇は身を守る最強の盾だが剣にはなりえない』

それも何となくがわかる。

『ブラック・ゲリモワール
黒の魔導書をやろう』

少し離れた手の届かないぐらいのところに一冊の本が現れた。

闇を使い手元まで持ってくる。

今闇を使ったがおそらくものを動かすならこの程度しかできないだろう。

「ありがたく受け取るよ」

ここに来る時は長かったが、今はこの力がある。

体が闇に包まれた、すぐ闇は解かれその場所は長い通路の入り口だった。

「いやー便利だなあー」

ハマっちゃいそう。

「さて、戻るか」

俺こそ主人公のはずなのに…（後書き）

ちょっと真面目な感じになるのは珍しいです。

俺強えー！

「終わりましたよー」

「おお！お帰りになりましたか」
結構オーバリアクションだな。

「で、早速だけどこれどうすりゃいいの？」
黒の魔道書を差し出した。

「それを読めばいいだけです」

「ずいぶんと簡単だなあ」

ま、簡単っていいよね。

「そんじゃちよっくら」

パラパラーっと。

瞬間。

「ぐっ！」

知っているはずのない知識が頭の中を走馬灯のように駆け巡る。

「なん だよこ りゃ あ」

思わず膝をつく。

「くらくらすんなあ」

と言いつつもだいぶおさまってきた俺である。

「おそらくそれで魔法などを覚えたはずです」

ん、確かに頭の中にそれらしき知識がある。

「とりあえず軽いのうってください」

んーっと今おれが覚えているのはー

そのー

死霊召喚 論外

その二

マインドコントロール これも論外

その三

周囲2kmから生命力を吸収 ドレインフィールド

その四

隕石を呼び、辺りを荒野に変える究極魔法 メテオスウォーム

なんかやばいのばっかだな…

まあ、黒の と銘打つ魔導書だしなあ。

お、イイの発見

ファイア

初級魔法みたいだしいいよね。

まずは魔力を集める。（初級魔法だし軽めに）

そのあと、魔法の系統種類を宣言する。（宣言するのはイメージを固めるため）

「攻撃・炸裂」

系統種類というのは、ファイアというただ炎を燃やすだけのものに意味を加えるもの。

まあ文法の活用形みたいな感じ。

この場合ファイアは攻撃用として放たれ、炸裂するものとなる。

そして魔法名を言い、集めた魔力とともに放つ。

「ファイア！」

そして、手から放たれたのはメ。ゾ。マもびっくりの大火球だった。

「へ？」

ボツカーン

もちろんこんな生易しい音ではなく。
神殿の半分近くが吹き飛んだ。

「いくら召喚された選ばれた人でも限度というものがあります！」
そして説教中…

……二十分後……

「まあ、あなたにも修行の必要があるので、勇者はもう先に王城であいさつを済ませ、修行を始めたようです。あなたも混ざって来なさい、あなたは目立ってはいけないので、王へのあいさつは要りません」

つつかれたー

「はいわかりました」

俺めつたなことで怒られないから説教なんてひさびさだなあ。

「案内してあげなさい」

司祭はそこの神官に言った。

なんかえらそー

「はいわかりました」

……道中カット……

ここは王城の訓練場。

えーつとさつき教えられた通りに。

「勇者様と同じ世界から従者となるべく召喚された大魔道士見習いの佐藤祐樹です」

俺のあいさつの相手はもちろん勇者のはずなんだが…

「えへへ、そんな畏まなくていいですよー私は光^{ひかり} 美輝^{みき}です。気軽にみつきーとか言ってくれてもいいですよ？」

なんかほわほわした雰囲気的美少女だった。

「それでは光さんと呼ばせていただきましょう」

「んーもつと碎けてほしいんだけどなあー」

さすがに初対面でそれはちょっと。

「ま、いいや訓練の続きがあるからまったねー」

「大魔道士さま、どんな訓練がよろしいですか？」

横からいきなり声がしたが、どうやらおれの訓練を担当してくれるようだ。

「うーん」

あの調子だと魔法の微調整はムズそうだなあ。

頭の中の魔導書をめくる。

お、いい魔法発見、これなら。

「よし組み手をしよう、実戦形式の練習だ」

「？」

……一時間後……

「くつくつく、はーっはっはっは」

俺は死体の山を周りにつくり高笑する。（別に死んじやいない）

「弱い、弱すぎる、誰も俺を止められないのか」

俺の武器はナックル、グローブのようなものだ。

この武器にした理由が、空手とボクシングなら神の領域にある自信があつたからというのと、これなら遠慮せずに使える魔法があつたからである。

それは三つあり、一つ目が加速魔法、二つ目が身体強化魔法、三つ目が武器強化魔法である。

ともあれ今日の訓練時間は終了らしい。

とりあえず手でも洗うか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8802y/>

俺が世界の主人公

2011年11月30日00時58分発行